プロローグ 二人の男

乏しいものがあった。 岳と標高3000m級の山ばかり目指して登山をしていた。装備は十分に揃っておらず、 登山初心者エディ(江田靖史)。この本の著者。この男は、山のことについて無知に等しい。富士山、剣 山の知識にしても

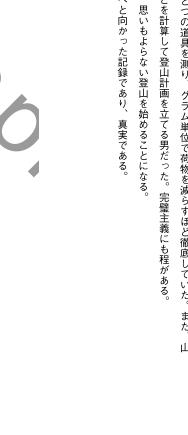
の甘さから、日没まで下山ができずに暗闇の中を、下山することになった。考えの甘さにも程がある。 二回目の登山にもかかわらず、標高差2260mある剣岳に通じる馬場島からの早月尾根に挑んだ。計画

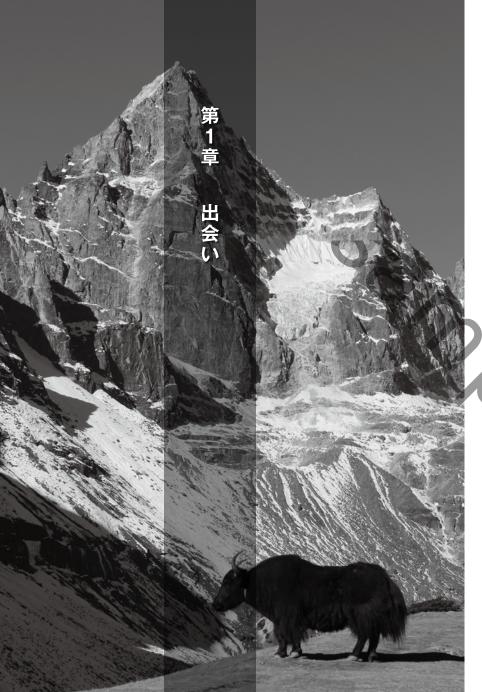
ても申し分のない男だ。教員にも関わらずヒマラヤ登山に4回も出かけている。標高5000m級までの山 の事は知り尽くしていた。 エディの登山の師匠となるジーン(三長仁)。全ての持ち物にこだわりがあり、登山の経験や知識につい

の形状や天気、人の込み具合などを計算して登山計画を立てる男だった。完璧主義にも程がある。 山に出かける前には、一つひとつの道具を測り、グラム単位で荷物を減らすほど徹底していた。また、 山

似ても似つかないこの二人は、

この話は、頂を夢に変えて山へと向かった記録であり、真実である。





なり H しているよ。 に良かったと思っている。 かどうかという問題だ。 43 同の出 Ø 悩んだよ。 か、 のところだった。 迷っ τ ジーンがピークにアタックをかけるタイミングは、あの時が一番よか $V^{\mathbf{y}}$ た。 あの日の決断 あの朝、 あの時は、 ほかの誰に何と言われようと、 ジー 最高に悪いことしたと思ったけど、 を、 ンと一緒に登ることが出来ないことをどう書 書くの は勿論のこと、 あれはあれでよかった。そう確信 どう心を整理してい 今では、 あれで最高 43 14 ~ったの たら の か か 14

5 の か、 そして、 姿を見せられたら、 5 3 6 が この本も、 二名。 また、 あ ٧v V. の景色が瞼に焼き付い 0 そんな姿を見せてくれてありがとう。 ジーンとエディ。 楽しそうに映ってるのが、 ヒマラヤ談義をしよう。 登頂」最高の一枚だ。何よりも、 最後まで書き続けら あきらめてい 最高のパーティ て離れない。 61 ħ なんて思えなかった。ジーンの生き方を尊敬 たのは、ジーンのおかげだ。 二人で映る数少ない写真。 د کا د کا 0 一日として、 かっこよくはないが、気に入っている。 1 最高に疲れているのに、 一緒に登ったことを誇りに思うよ。 (登山隊・ 思い出さない日はない。 仲間) だ。 「祝 標高50 それを感じさせな ゴーキョ Ŏ 0 m • してい から ピ ー 草登山家 63 あれか うの日 Õ 登る ク る。 14

別の 時、 ジー ンが残された命を全力で生きたように、 自分も、 自分の人生をまっすぐ

きるだけ とが 残され 思う。 れから 積み に歩 な境遇にいても、 然に育まれ、 だ。 ß めるように、 れてきた。 ながりを大切にすること。 これまで自分を支えて 5 ある そして、 τ ĥ の た人の 震災は、 の ように残って で 61 のも った。 応援していくことだ。 出会いを大切にしていくこと いきたい。 その故郷 私は、 多くの 心 東日本大震災の復興をで 知っている。 取り返しのきかないこ から、 家族や建物以外にも 夢や希望をも 前進してきたい 人や仲 12 のみんなが、どん 残され る 大事な何かをさ そして、 そん 間に支えら た た人との 題とは、 な中だ あの自 って歩 駬 ح と 5 Ш



第6章 新たな世界へ 日本